

常山紀談

拾遺

二

和書門			
四二〇一	三三〇一	二九〇一	一七〇一
類	號	函	架
冊	冊	冊	冊

內閣文庫		和書	
四二〇一	三三〇一	二九〇一	一七〇一
類	號	函	架
冊	冊	冊	冊

內閣文庫	
番號	和 42301
冊數	17 (14)
函號	170 49



常山紀談拾遺卷之二目次

常山紀談拾遺卷之二目次

淺草文庫

一家康公駿府御花見の事

一朝鮮攻小後藤又兵衛物見の事

一藤家足輕具足と着る事

一同家騎馬武者馬上鉄炮の事

一藤堂高虎家中具足の事



一同家士梅原庄右衛門剝物頼當の事

一讃品源英公の家士西尾右兵衛が事

一高麗陣の時完耳太郎兵衛南大門一番のりれ事

一同陣清正の家来矢木八右衛門矢疵の事

一大猷院様日光山繪図御覧の事

目録

一 関ヶ原御一戦御勝利稻次右近高名の事

一 上杉浪人門田造酒之丞物語の事

一 丹羽五郎左衛門物語の事

一 榊原の家人黒田彦左衛門の事

一 浅野左衛門家人永田治兵衛働の事

一 信玄豆菰葦山まろつめ山縣同心辻弥兵衛働の事

一 三羽吉田城迫合信玄廣瀬幸と得る事

一 撰品花熊城攻夷寺清右衛門八田八左衛門手柄の事

一 輝政公武將の重宝と示る事

一 家康公尾羽小牧合戦御勝利の事

一 家康公同合戦御自讃の事

一 福島正則関ヶ原出陣日柄の事

一 同役吉村又右衛門高名と失ふ事

一 同役岐阜落城の事

一 同役田中兵部太輔長胤の中間水鍊の事

一 同役石田三成浮田秀家が諫を用ひざる事

一 同御合戦毛利秀元戦場みく東方へ返る事

一 同御合戦終り御詮議の事

一 同翌十六日江只佐和山へ向りて處大雨ふりて御下知の事

一 同牧方面小御旗を立ちて首御實檢の事

一 備前少將光政の士上泉治部左衛門具足箱評話の事

一 滝川左近將監一益極暑小馬上みく川を浅す脱水と飼事

常山紀談拾遺卷之二

備藩 湯淺 元禎 述

同男 明善 校

○天正十八年秀吉卿北條家を退治とて小田原へ發向は  
 前方 家康公も頓て御出陣の前駿府近辺花盛の儀を  
 御覽遊よしし御城中御矢倉の諸方能く之儀所へ御上り  
 をとられ御老中御供あて御菓子御酒等下されその後  
 御咄の次で各へつゞぞ尋儀とんと存あざり取給儀  
 先年長久手一戦のりれ昼の合戦より我ら勝あて小牧は  
 要害へ取入居儀處秀吉ハ二重堀の陣場より一戦の心掛  
 みく馳來らま儀へども日暮及び小牧城攻ハ明日の義

と有て其夜竜泉寺川原小野陣を張居らる候處を夜軍仕  
かけ候り然るべき由各す免らる候へども我ら不用  
し其夜中よ小牧の陣所へ引とり候る夜仕かけ候り  
大岡を必打留申べ兒と有心も候る左様候り勝利と  
疑なり存らる候やと御尋よつき忠勝申上らる候と  
直政康政へ昼御一戦あも逢候へども私ハ小牧の御留  
主小居申一夜軍望しく存候大岡を打とめ候処まで  
心付申さばと申上らる井伊榊原も申され候ハ竜泉  
寺表へ遣し候伊賀甲賀の罷歸り上方勢は夜守  
夜合戦の備もななく無法の陣取と申候よ付御仕掛候ハ  
む御勝利と存奉る候秀吉を是非打とり候處やと考

申さずよし申上らる候 権現様御聞あそむられ  
各左様有づくと兼る存る處ありそめ節夜軍ふかく  
らむ必勝べしと思ひ候然るがう太岡を打ちらる候  
りごらんぐの候と思ひ右趣を用いざるなり其子細ハ  
秀吉ハ一度天下一流の太功を立んと合まれ候然るに  
長久手十万の勢味方織田合てもさう三万ふ不及るま  
あゝ戦陣も誉なるに昼の一戦から十分の仕合あり  
又夜軍は勝て秀吉を打洩し候り至極の頁といきど  
をり天下の望より先徳川家を潰すなりそめ所存つて  
候り無益の義なりと存らる其心入ゆ此度も北条を  
押さる夫より出羽奥羽まで手よ入天下一流の功立

ぞくぞく心掛と相見へ俄と仰らまはれ何をも感心奉り  
しやちり

○朝鮮の役は黒田長政後藤又兵衛尉基次を物見ふつと  
さふ基次やぐて馳向ふ處は其道ハ一ツの河ありそは河を  
打つり敵陣の近所を行んとせし日本馬の音川  
上より流を來るを見て早川上の味方の勢は川をこ  
すしと推量し川辺より直に引返して長政の前小飯  
り味方の人々の内早川とある玉ふと存るなりそれ  
敵陣近く参りて物見仕るふも及び立しり俄つそ  
ぎ打立せ玉ふべしと進めしうが長政大に喜び玉ひ後  
藤基次が武勇の功者なると今ハ始免ざるとあぐり心

早き物見の仕様か出かしりちや打立と云玉ひさ  
基次是より前も朝鮮も長政の先手山の端を  
廻りうが敵と出合せ戦ひしうが味方のと揚  
るも後藤聞し先手のたう味方打負しりとい  
長政きく玉ひ山のうのむと汝爰小有あぐら味方  
の負しり何を以て知ぞと尋ねらる基次承りさん  
俄味方のときあぐ次第小近く聞ゆら一定負けし  
引と覺へ俄勝軍をうらば向へ進て関を上るも遠く  
とれは俄と申もあぐ味方敗軍の兵ども朱より  
追々きくも又兵衛がさつする処神の如しと感ぜら  
る又其後は敵の陣しるる所なりし遥向ふ馬煙

おびくく見ゆるもの小軍の勝負ハ何ぞ有らん  
と宜へば基次かこまより敵が打負け引と見へ俄其  
故のまきむ敵の武者がより此方へかこめて黒く  
北の敵の武者がより向の方へかこめて遠きゆん  
は白く見ゆるもの小儀遠きを色く死ゆん白く近  
き色の濃きゆん黒く是の白く見ゆる小より  
て敵の敗北とて俄と申すその言少しもたごのさ  
敵の勢敗軍おびくより晋沢の城攻め別して先登  
小まきみ勇をより加藤清正も後藤が武勇を大  
感いらまきより戦功を尽ししゆまの黒田長  
政筑前入國の後嘉摩郡大隈の城小ゆりて一万八千石

の采地を玉りりくる猶よ々後の大坂の役その勇戦を  
見つゞし

- 加藤の家あてり足輕具足ハ不着曹むりかより曹の  
股立小長二尺は白き練一幅の小あてを両は二本立  
る清正の物語は他家ハ具足を着せ曹ハ不着或ハ  
張抜の笠をかゝると見へより身小皮具足を着て毛  
頭ハ曹をかゝらざるを死せぬがさゆめありと  
曹を着まが具足ハ不着してもさよ物なりと  
被申とゆり

○同家より大小身ゆりに騎馬ハ一尺三寸或ハ一尺五寸の  
鉄炮を馬上小持ち陣前を打放し鑓を初るとゆり

清正家中の老人後、吐せし馬の上、火繩何事も難持者ありと云々

○藤堂高虎の家中、足輕中間、胃を着金の桃形の胃、小一枚、銀の鳥毛の引廻しを付け、胴の古ハ金の鎮近年替り、胴中を三分一金する中間、中白筋の羽織あり、物頭ハ不残胃の押付、小白熊付る白き髪を下げたる如く、胴より下へかゝる見事なるよし

○同家士梅原庄右衛門ハ伊賀の武羅組なり、刺物を横り、斜まさ付是をぬき、刺と云ふ右へ斜まさ付を、腰ハ太刀ふ、さし、法ゆへ、左の方へ斜まさ付あり、此士の三本、靡ふ、鉦子十七中、るゝとあり、此士刺物の柄を打柄あり、請筒

待請合足をつよく丈夫とする、此意ハ或城乗の石垣、屏高く登り、がさりしを、下人石垣の上へ、ちやく登り、庄右衛門が刺物を取り、引揚げ、一番小城をのり、るゝゆへ、尔以來如此、まゝあり、此士元來池田伊豫守秀雄の家士あり、又此士、頬當の露を、くは、穴を廣くする、此意ハ、頬當を着し、飯を食する、それ、頬當の透より、と、るゝ、小落つ、るゝを、指を入り、掃之、宜し、るゝ、又、氣も、散り、かゝる、宜し、とあり、梅原ハ江戸、浅草、知樂院、伯父あり

○讚、源英公の家士、西尾右兵衛、率人の、るゝ、有馬の役、寺沢家の備を、かる、狸々皮の羽織、小朱熊の頭刺物を、さす、此



士の喉に鉛子あつりたるに頬當と掛ざるゆへ柔うし  
弱くあつりたるゆへ喉の皮は玉留り死脱するの鉛子後  
まで留りしるしと有しゆゆり其鉛子年々下へ下  
まうとあり右のゆへ一生頬當と用ひどとゆり

○戸川肥後守の父戸川平右衛門家士高麗陣の砦馬場重  
助と云その南天門の棟へ上り内を見まぶ一人もあ  
り味方をめくり招く同家士完耳太郎兵衛續し  
上り大門の一番のり完耳太郎兵衛と名のる之に依て  
重助功を空くを加様の事此武功有べしとゆり

○同役清正家來矢木八右衛門と云者晋及の城攻の事此具  
足の綿嚙は矢を射付られ取て抜れども矢柄計抜て根

へ止りこれどもその場忽ちあるゆへ其ま城へのり  
込るその夜陣屋へ帰矢の根を抜るも肉は喰ふ  
先て抜ざるゆへ手負を足し踏付けて矢の根を鉄鉋を  
以て漸々抜ゆりとあり或老功の者云し矢根を當坐  
は抜ざる事此肉は食し先て不拔物とゆり

○大猷院様日光山の様子圖あり御覽可被遊と画師泰り  
委し圖さるゆへどもあうと埒あはば北条新藏後  
安房守をつらされ彼節一覽仕り帰りて御庭の砂みて  
氏の圖を仕り御目小かけ彼ら後則安房守を奉行ふ  
仰付らる御普請出來の由ゆり

○慶長五庚子年関原御一戦九月十五日其前日昼前ふ

大御所アサカの赤坂アカサカへ御着陣ミカドノマタ被遊カゼ候ヒル昼時ヒル分ブン石田イシダ三成ミツナリ方カタより  
島左近シマササキ蒲生備中ウラハモロウ大將ダイシャウあり杭瀬川キナノカハをめぐり外田ウチノタ誘引ユウインをわけ  
其口ミチノク中村ナカムラ一學陣取イツガクチントリの際サカイあり竹田タケノタ五郎兵衛ゴロウヘイ一氏イツノ姪ニヤヒ掣ヒキ三  
間計ミマケの鳥毛トリケの捧テのさしものあり陣所チンジョの堀ホリをめぐり治チ  
部ベが勢セへかけ合アヒ三人サンニ鑢付リツツキ候マシを鉄炮テツポウのりく打倒ウチコロシ候マシ竹田タケノタが討ウチ  
ま候マシを見て中村ナカムラが兵ヘイども柵サクの踏破フミヤリ争アラフて掛出カケ候マシ野一色ノイツシキ  
頼母タノモ金の三弊カネノサンヘイの藪内ヤブナミ推オシつゞれかゞま候マシ治部チベ方カタより水野庄ミヅノ  
次郎ジヤウ左馬介サマノケ浅香アサカ林半介ハジメノケ伊前イサキ頼母タノモあどかま候マシこれ五百  
余進ヨス候マシ備前ビゼン勢セあり明石掃部アカシカモリ一宇喜田家老イツキダノカノ本多對馬守ホンタノタマノ西大  
將シャウは稻兼イナノカミ助タケの亟ヤウ不破内フナハ等トナリ八百餘ヤクハチノヒ出デ候マシ石田イシダが物頭モノカシ嶋左  
近シマササキ蒲生備中ウラハモロウ伏兵フクヘイを木戸キド一色村イツシキノの藪ヤブに伏置フセマキてひき候マシ小よ

中村ナカムラが勢セ是コトを志シし進マシ申マシする処トコロを打立射立ウチタテイ候マシと兩  
方カタをめぐり鑢リツツキ初ハジメり候マシ中村ナカムラが成合ナリアヒ平左衛門ヘイザエ一番イツバンやり仕討シウチ  
死シ仕シり候マシ首カビは猪尾イノビ甚シ太夫タウより中村ナカムラ勢セ敗軍ハヤシ仕シ候マシ家老カノ野一  
色イツシキ頼母タノモ鳥毛トリケ二の團子ニノダンゴの馬印ウマノシをとりて川の東ヒガシより立  
一足イツソクも引ヒキよぐ候マシ候マシ何ナニも敗軍ハヤシ見ミ苦ク候マシ候マシと  
旬ツキり候マシ藪内ヤブナミ面オモ六千石取ロクチンシキトリ中村家老ナカムラノカノそめ服ソメウキを引ヒキて通トヲり候マシ内面ウチノオモ何ナニと  
て返カヘし不申マシやと頼母タノモ言コトをわけ候マシ内面ウチノオモより歸手カエリテ負マシ候マシ由ユ  
へ返カヘし不申マシ候マシと断川ツグナリを西ニシへのり渡ワタり候マシ服部フクベ小膳コセン高屋タカヤ九  
兵衛ヘイつづきも弓鉄炮ユミテツポウのそめ頭カビテもみり覚オトシの兵ヘイより候マシへ  
そめ押立オシタテらるマシ候マシ崩クツを申マシ候マシ野一色ノイツシキ頼母タノモハ金の三弊カネノサンヘイのそめ  
そめりて馬ウマをひき返カヘし數度スドたぐひ候マシを治部チベ少輔シヤウボが

内海北市郎右衛門鉄炮にて打申し一俵頼母炮より馬  
より落則討死すれ組子松村清助頼母が死體の綿嚙と  
まて引ずり退き俵へども治部人數付立俵ゆへ頼母表  
帯を切刀股差がかりりて退申俵あてりて頼母首を  
富村と申兵より申俵治部方多勢追重りゆへ中村家人  
中村新介河毛新八同次郎原田梅津天野堀口等二十八人  
討死仕り俵甘利左兵衛ハ川中あて立合防たり俵鎧  
手二り所負退きく俵を石田が兵ども追付俵吉田左太  
夫返合追拂て甘利を志望せり俵中村並の陣ハ有馬玄  
蕃頭豊氏あて俵此合戦を見て有馬が兵ども數十人柵  
とあてり進申稻次右近島毛半月より此岡本五郎右衛

門真先進て川をのり渡り治部方の勢中村敗軍を追  
來俵出合頭ふりて俵稻次右近馬を岸へのり上俵と金  
の制札の頭上立物の兜着て横山監物と名のりかき  
俵右近と互に馬上よりり合そりち馬より下立  
組打となり右近下より申を右近郎等岸又左衛  
門監物が鎧の綿嚙より引かき俵へ右近上より  
俵監物若黨かけ付右近が兜の鍔よりり付引仰俵を右  
近より放さんと頭をある処へ右近が若黨かけ付監物郎  
等を切俵へ右近が兜を放り抜合防合申俵あてり所  
へ堀尾信濃守忠氏の母衣の衆一人かけきり敵味方  
ともあへず右近が若黨を味方討よりり首を取引返

一彼その内ウチ右近ミナトの監物ミヤモノが首カビをとり立上り監物ミヤモノ若黨ニギトウを  
も切キみせその首カビをとりニツニツまで高名カウシヤウし若黨ニギトウが首カビをバ鞍クマ  
の鹽手シホテは付監物ミヤモノ首カビを奪ウバ付て手小ササ提馬テウバを静シヅ々と歩アヒで中村  
が陣中ジンチュウを通りトホろろに見る人ホメ譽ぬりのホメかゝゝ其場バ過サて備  
前秀家の家老カウラウ明石掃部アカシカモン三百余イチヒツリり池尻イケジリより福田繩手フクダナハテへ  
廻りマかゝる来り彼中村一学カク人數ヒトミヤ乱シれ彼を矢野助之進ヤノノシノジ金の  
廻りマの只一騎キまで取トつて返マして大勢オホセの敵テキへ立向タチムカヒ彼林文太夫ハヤシブン赤  
衣アカ金の拵カサも返マして合傍カウバウ輩ハヒの梅田大藏ウメノオウザウが深手フカテ負オシて退ヒく孫ムコ彼を  
助退タケノシノ申マウ彼助タケノシノの進シノ屹キツと見ミ付ツケて梅田ウメノを助退タケノシノ彼もタケノシノより此大  
勢オホセの敵テキを防マげ候マウへと言コト葉ハをマかけられ文太夫フタウハ梅田ウメノをすて  
馬ウマ小コ声コエをマかけのり出デし助タケノシノの進シノも馬ウマを踏フミ立ツ二騎ニキ連ツて掛カケ入イ

と明石掃部アカシカモン蒲生備中カモウウヅが人數ヒトミヤ崩クツレ申マウ彼兩人タツ勝カチり乗ノり追打オヒ候マウ  
赤坂御本陣アカサカホシジンより大御所御遠見オホミヤノトヲミをマされ大事ジの合戦カウセンを明  
日ヒ小コかゝ無益ムエキの軍イクサのヒ人數ヒトミヤを損ソシじ申マウ彼早サウ々ヒキ引ヒキ揚ヒキげ  
連ツて戻モドり候マウへととゞゞゞ御腹オシウラ立ツまり渡辺忠右ワタナベタダユ工門  
重綱ヒゲツナ金手カネテ桶ツケを遣ツガはれ候マウへども敵味テキミ方カタくひとろり候マウ  
大御所オホミヤ殊コトの外ホカ御怒ミヤノイカリをマされ井伊直政イノナオキ兵部少輔ヘイブシウボ狸ヌ々ヒキ緋羽ヒノ  
本多ホンダ内ウチ記キ忠朝タカアサ後ノチよ出デを御ミヤさゝるマされ遣ツガはるマ彼直政ナオキ  
忠朝タカアサハ中村ナカムラの陣ジンへ馳カケ入イ早サウ々ヒキ引ヒキ上ヒキ申マウべき音ネ申マウ渡候ワタシと矢  
の助タケノシノの進シノ林文太夫ハヤシブン敵テキを追立オヒし戦タケ申マウ彼直政ナオキのり付ツケ何ナニ  
とゞゞゞゞゞゞ仕シ候マウ早サウ々ヒキ引ヒキ上ヒキ候マウへと下知ゲつマゞゞゞゞゞマ彼助之  
進文太夫シノブンより返マりマるマ所トコロをマか此兩人コノタツハ御任ミヤノマカせ候マウへ兵部ヘイブ

殿内記殿より有馬玄蕃手へ御下知候へと申し拾切め  
と遂小大垣方をきり崩し夫より敵味方入交りせり合  
候あめられ治部少輔が兵水野左次郎龍の皮の羽織銀の  
大釘の立物の塊あつたを来り中村母衣のものを梅田大藏が  
手負て引兼候を首をとり大撈へのをとり三成隅矢倉  
小居候下へ参り水野庄次郎より御坐候高名仕候間御  
勘當申免下され候へと叫り候治部少輔の心を得り  
高名も見届候間先手を頼候早々参り取られ候へと申候  
小付又庄次郎の先手へ参候より有馬玄蕃頭も田中兵  
部も中村一学を助て多勢のりかき候ゆへ秀家内縮  
兼助之亟金切さき治部が使番林半助衆を下り殿仕

彼明石掃部も堤を傳衆上馬に輪をかけ殿仕候一旦村は  
藪の下みち中村勢有馬勢のり付處を牧野傳藏が兵  
ども又備前勢少々踏留り候丹羽道監と石黒藤兵衛立こ  
ろり見事候候候て日も暮かき井伊直政幣を  
とりて中村有馬が勢を引上て帰らる候

一説中村が軍士等太垣勢小掛留らる未堤の下小有  
り子を大御所本多中務太輔忠勝を召て其方急ぎ  
馳越中村が手の者を引あぐべと仰られ忠勝頼り  
御前を退き騎兵と足輕を相俱して株瀬川より中  
村が兵士を引とせ忠勝の後殿より退きくも秀家  
三成両家の兵士猶らひ留りも勇くくも本多が縁

引の列伍乱れざる故よりさすづのり付めもあせりか  
秀家の軍士船乗助之亟の背旗三成家人林  
半助指もの兩人諸兵先達と進み來忠勝が備ふ近付  
て兩人ともは輪をかくる 大御所あまを御覧あつて  
武者ぶり見どありと仰らましとや 右の品實録か  
まもも借求見し故より爰ふ記を然るを此の井伊氏あは  
とまきの殿の相違なるや猶やうとわづらひ可書改う  
此の如 大御所の赤坂岡山の本陣より御見物あり  
井伊直政人數の拳搦中々足手をつつと様より下知し  
引とり能き見物なりと入々申し候秀長三成人數も  
漫々とも引大垣城へ引へる勢の内より白あまひし

くる武者一騎のり下り見どに殿仕候 大御所白志な  
ひ見どよ候と度々仰せられ候此の如中村少方究竟の  
兵士三十六騎討死殊に一学家老野一色頼母討死仕る味  
方へ討とり申候首の有馬玄蕃頭内船次右近が討取候横  
山監物主従二人の首計あり此の如右近の御本陣へ泰  
候と 大御所御覧なされ鳥毛の半月の先刻るは陣下  
を通り敵より向候き高名仕候やとまが者と御尋あ  
ま有馬法印御傍より居らま同氏玄蕃家人と申上る則  
首帳より付申船次申候の我より先より首一ツ持來りて候  
仁有候やと云筆者申候の中々堀尾信及の母衣のもの首  
一ツ持來りて帳より付候とら船次承り夫の我家人を味方

討よ仕候より御帳をけし一俵へ下されと申則 大御所  
御聞あきま何更を申也と御ち候に被成俵筆者承り  
右近グ申俵通りを申上俵へバケ様の打交り軍あ味方  
討よても高名より俵例もあま首帳消申間敷と仰  
られ俵あぬと堀尾信及方へ聞へ母衣十走の兵ども  
敵味方見分むらたくもの母衣仲間より不罷成俵そ  
のあり御置可有俵り、縄をさし上俵と訴訟仕り俵堀  
尾帯刀吉晴きく尤も俵よりかの者の縄をハ召上仲間を  
ちづま加増とあしり廿人預り俵より有馬玄蕃の稲次  
右近高名を感じ本地五百石の上より六千石加増を遣し  
家老に致し俵先年肥前島原より八十五支あり討死仕

○上杉浪人門田造酒之丞ハ浅野采女正 彈正次男左 正則小  
奉公かの門田がものかより日本条越前守重長の越  
後本条城主大剛一の大將上杉より一二を論ぶる程の  
武勇あり永録十一年本条越前守逆心するより輝虎直  
に出馬あり飼付川を阻て本条も出向ひ一戦あり輝虎  
先手ハ上杉弥五郎義春二の先ハ直江山城守兼續三番ハ  
景勝十四歳鉄上野今栗林肥前守介とあり四番ハ謙信  
旗本あり上杉弥五郎自身川へのり入れ故毛蓑與十郎  
のり込一備一度ふのり入俵本条重長人数も川へ打入  
川中あり鑑と合敷刻たかむ俵所へ三の備景勝手取へ  
押込鑑を錫扶持しと勝とくと声をかけ二千討真黒

おなまらしく川上へ打入本条が前へ押廻し候ふ付本条重  
長敗軍あり重長乗下り殿して退所へ上弥五郎乗  
付重長小組んと志し申され候重長小高き所へ馬を乗  
上扇をひらき弥五郎殿ささぐふを見ごとく候去るがら最  
早引り候へ深入めされ候越度とより玉ふべしと  
云弥五郎本条より組とせしめて引かす此本条の大  
加ゆく大男度々の軍功數をあらはし国境なるや最上義  
光と取あひ庄内をすれ半切せり天正六年謙信逝去候  
より景勝へ使を立上杉御家譜代の者あて候輝虎公ひび  
ろくを御意よ違ひ弓矢小あうを成候上杉御家恨無之候  
間歸参仕度とて景勝へあうがひ上杉三郎方を攻めとて

夫より今お悪く奉公とせり最上殿と千安とて  
本条戦のより紀と甲と切りこの刀正宗なり後秀吉公  
御代に伏見御普請小村本条重長在京し勝手つまりかの  
刀を賣る本阿弥より次家康公へ被召上本条正宗と  
云後紀伊大納言殿へ進せられり又甘糟備後  
守へ上田住人あて是も小身より武刃にて成立謙信秘  
藏の兵より後大身より取立られ景勝家より本条重長と  
牛角の兵あり景勝會津へ泰らまは白石城主とて五  
万石下され候福島城へ本条重長築川の城へ須田大炊  
なり関が原御陣より関が原御軍のとき甘糟備後會津  
おあがらる罷有候あてり堀の登坂式部逆身し政宗



へ白石城をこし候式部も政宗へ行夫より景勝無興して  
甘糟備後守を遠のけ言もめ多ず備後守も日陰者の様  
一ちり罷置有候 家康公聞し召及びし大剛名  
譽の兵ある故に御望し思し召畠山下総守義直に仰遣  
り守景勝目見を悪由早々立退御旗本へあり候へ二万  
石もて召出さるべしと仰遣りし京も下総守方へ  
備後守を呼て上意の趣を申さるす本多上野介正純  
書状をせ候へ備後守頭を地へ付景勝目見悪し  
拙者の不調法少も恨脚坐さる候へ何様致  
さる候も譜代の主は候間御免下され候へ上意の有  
かゝり存じ奉り候旨涙を流し申候も段達上聞

候へばそれ忠義信の所より猶ゆれば兵也と仰せられ候  
畠山は逢候し何とてそれ聞へ景勝つよ不興し  
我はかゝるは畠山方へ行と言語同断をせし甘糟  
ゆし申され候備後守死去子共の跡式申付らる候  
津輕へ浪人仕あり右兩人の外は大剛のもの主大將分  
もの多し千坂對馬守あまは上杉四家老のツ  
見どなる士とて何方へ大吏の使に越候も一か  
明べき仁体たり分別者なり岩井備中守の謙信小姓立  
く見どなる男武辺度々あり分別弁舌兼備り名高  
ぎ兵もて殊茶湯者あり安田上野介小男あり手  
あるゆに少足を引眼し光ありて何者か見及ても剛

ラ由

の者モノとつねぬ人なり中々すゞしくケガカ氣高き士なりシ杉原  
常陸ヒタチの武辺ムラサキめと有て平人ヘイよゆらぐべフンベツレウケン分別了簡大シ一シ  
軍功カシコウ數度あり糸イトくクものさしナラエヤマシロ直江山城守ナラエヤマシロる  
大男オオヲコもく百人ヒヤクニンもさうサウなるもつツていイてテ学問詩ガクモンシ  
歌カの達者タクシャ才智サイチ武道ブドウ兼カミする兵ヘイなりナリ恐オソくり天下テンカの御ミ仕置シゼキ  
ふかフカくク里サト恨ウラミともあアどドむムじジきキ仁ニ体テイありアリ嶋津シマツ下々シタタ奔ヒキ是コト  
ハ戦功センコウ武功ブコウ肩カミを並ナリぶる人ヒトなりナリ其外ソノホカ能ヨキ士シ多タくありアリしシ  
ぢチも今イマのちチやヤのノこコもモ死シ果ケてテ二代ニダイ三代サンダイよヨ及キつツりリと  
門田カドタものモノがガうウりリなりナリ

○丹羽五郎左衛門長重ニノウエノサヅサヅサヅサヅの咄ウタガハシ鴨野カモノ口クチ少オチく我等ワラウも仕寄シヨセを付ツケ  
る景勝カゲカツ出デて我ワらと仕寄シヨセを付ツケ申マウべし先是マゼ方カタる流ナリし橋ハシと丈シ

夫ソノ小懸コケテより申付引込直江ヒキコムナラユとぞト免手テぬるき人ヒトのノ思オモ  
ふ氣色ケシキもモ橋ハシもモかカ多タ景勝カゲカツさサ出何イデナニもモ橋ハシのノめメ多タぬヌぞゾ  
と被申サイマウ西条治部サイジウヂ申マウハハ只今タビイマもモ橋ハシのノめメ多タ申マウべしベシ  
即取ソクジしシかけ申マウ景勝カゲカツ見ミて本ホトの仕寄場シヨセバをバ置ツキ腹ハラしシ土ツチ  
俵ヒラをヲめメ鉄炮テツポウをヲかけケ見次ミジ第ダイしシ土俵ツチヒラをヲ持モチ参マシと下知ゲダチ  
せセらラまマ大坂方オオサカカタ始ハジメハ用心ヨウジンあアらラふフがガこれコレ体テイをヲ見ミて上杉ウエササハ軍イクサ  
めメさサをヲあアらラぬヌもモかカくク敷シハあアらラじジとト引ヒキ入イル景勝カゲカツ衆シユもモ  
主ヌシの下知ゲダチを受ウケぬ顔カホしシ景勝カゲカツハ敵テキの油断ユダカンをヲ見ミまマすス財サイをヲ  
吹立フキタテと即時ソクジしシ本仕寄場ホトシヨセバへ土俵ツチヒラをヲりリとト持寄モチヨリ仕寄シヨセをヲ  
即取ソクジしシ前マエの土俵ツチヒラ置ツキまマすス仕寄道シヨセミチもモありアリ明日アシタ大防方オオボウカタ  
仕寄防出シヨセボウデ是コトをヲ見ミて肝キマをヲ消キユしシ真マコトをヲさサすス由ユ

○榊原の家人黒田彦左衛門と云兵あり大阪落城のそれ五  
月七日赤母衣かけたる敵を突ふせのりかゝる首をさら  
んとつるまらり候を傍輩の三枝勘兵衛のり付て彦左衛  
門その首の相討ぞと云彦左衛門のそを聞て首をも不  
取打捨てそれ身の鎧提先へゆゝ三枝をを見て又言葉  
をひけ彦左衛門相討ぞと叫ぶと弥聞ぬふりよ  
先へ通りまゝ敵を突倒能首ぞり初捨つるをバ三枝打  
ぞり儲遠及の病死申館林へ久世三四郎坂部三十郎を  
遣ま今度手柄高名の御吟味あり三枝勘兵衛申候ハ我  
ら取候首ハ黒田彦左衛門鎧付つる首とて候相討ぞと叫  
ぶ多候へどもそれまゝ捨て通り候申のりよ相打ぞと

呼候へども聞付む先へまらり候申あとおて此首を取  
候とりよ三四郎三十郎かれ黒田をよび是を聞か中々不覚  
と答三枝ハ黒田に向ふそれ方敵を鎧付候を見て相討  
と言葉をかゝるその方ハ其突伏つる敵をすて先へ通  
ふは付跡より相討ぞと四五度呼ぶ多候へども見かたり  
もせば余候は付是非なく彼敵の首を取候といふ彦左衛  
門ハ猶覺へ候はむと坐を立りぬらの時 両御所様  
上聞は達し御感淺からざりき  
○浅野左衛門家人永田治兵衛ハ病者あゝかけりて自  
由あゝば若者ども内々ハあの病者あてて何の役あも立  
べうづべとららふ永田己と傳聞人足ハと達者次第侍ハ

剛の者の役立無病又病者よりさうさうさうさうとつゝ  
井みく大坂方淡輪六郎衛を討つり其首とり付し  
持参し病者より劣る息災人と自来嘲つる人をさら  
ひくさうさうとつゝ淡輪六郎兵衛墓石塔榎井ふりり  
堀の淡輪新兵衛立ちつりと聞其戦の一番の吟味へ榎井  
一戦のそは亀田大隅守惣手の殿しとあつりの上  
田主水へ先へのつゝ榎井の町中のうらふ隠居る亀田をや  
と過してらさうて家より出て町中あつてさうさう大坂勢  
と鑑と合一番鑑さうり亀田へ河原の敵と追さうさう町へか  
け入鑑と合すると浅野右近土井大炊頭一咄候を聞と  
る人物かうりさうり

○信玄豆及葦山へさうりつめ焼働のそは葦山城の押へ山縣三  
郎兵衛をさうりあは玉ふは城中より備と出し追合あり  
そは節山縣同心辻弥兵衛鑑下の高名して膝の口をのぶ  
うし射らと其矢を不抜してさうりたる首をりさうり来り大将  
の山縣前より畏り居る山縣大は噴く味方の引さうりさうり前より戻り  
さうりさうり場を追立さうり

○三及吉田の城せり合ふ山縣内見科孕石へあはれ者を討廣  
瀬へ人へ討つれども身衆へ付さうりが故小信玄別して廣瀬  
を召御喉嚨をさうりして當坐の引出ものよ給りさうり也  
○池田勝入公撰及花熊城を攻らうりそは森寺清右衛門池  
刑部先八田八三右衛門父ありあは城の屍際より付て居る  
ラモ

多小城兵突て出く寄手崩々々八田氏跡小のり伏て  
 敵引入んとするを付んと思ひ居る小先の方より寺氏城  
 屍の腕木小より付らざりて鎗を持居り古来の兵  
 のまゝなることなるゆへ能くあらんと思ひ寺氏より五六  
 向もあとの方小同く腕木小づらさぐり居る小城兵敵  
 を追ちるひ城は入るる腕木はあるを不知して引入る  
 を寺氏腕木より飛下て鎗を取て敵を追かけ鎗を合  
 せ一番の功となまり八田氏も同く飛下り鎗取て敵を  
 追廻二番の功となまりとあり  
 ○輝政公武將の重宝とまききハ領分の百姓と譜代の士と  
 鶏と三品ありそれを如何と云ふは百姓ハ田畑を作りて

我上下の諸卒をや一まふ是は一ツの重宝なり譜代の士  
 たゞ氣は不應して扶持を放すことども敵国みて彼  
 者を實は扶持放するを不思して間も入るくかと思ふ  
 て疑ふゆへ敵国小返當なること何れも終は我  
 國へ歸て我兵となるゆへ是は二ツの宝なり又目見  
 る相図耳は聞ゆる相図ハ敵の耳目よかかるといふた  
 やとく敵国ゆへなうがとし鶏鳴ハ唯もそは相図を  
 らざりゆへは即ち敵国の鶏鳴して一番鳥も人衆を起  
 して二番鳥も食し三番鳥も打立なうと相図を  
 敵もそは相図を知らざるの徳ありよの三ツの重宝なり  
 是を三の重宝と立しや宜ふなり

○尾刈小牧合戦

家康公御勝利已小首實檢甲及の先方

廣瀬郷左衛門が云く我古主武田信玄大合戦勝利を得て

ら必引上げよれ場或身方の城へ入り入て二の目を討れ

ざるを第一と云上同国の士三科傳右衛門が曰く

遠かへ去年六月江北越前の境椿江城にて佐久間盛政

が中川清秀父子を討てそ威を振るといふも引取違

くして柳が瀬の敗軍今あり也と言上依之御人数小牧山

へ雲の如く上玉ふとあり

○小牧山御本陣小御旗御馬あつて或ハ張立或ハ隠し玉ふ

上方の勢旗は心つと味方の人氣を敵に見せき

長久手表へ悉く敵を釣出し敵は先手を捨て旗本を

討破る御備あり此合戦ハ公後々を御自讃あり

○福島正則関が原の役趣のぞれ出陣の日往亡日あり或人

諫曰占之趣出て再無帰夏と候へバ他の日小定めらる

よとつ正則聞て實吉日あり我此度の戦功名第一と被

言働を遂大國小被封て行運尽るが討死と思極とり志

うま何を再びあめ地は帰らんや日を替るに有べく

ぞく出陣せられしが果して働功拔群あるが故は勢備兩

刃五十二万石は被封とり

○同役正則尾越の渡を越て秀信の兵を追り城兵一騎後

まて引行所を正則の士吉村亦右衛門馬を馳て追之已小

追付んとせしが幅二尺斗の溝よのをかきり吉村が

馬曲あり此所小つり狂烈尻込し不進長尾平右衛門  
を遥あより馳來りくるがかみ溝を濯ろしかの武者を  
討ちまりり戦場小ての曲馬の專撰りべきとあるを吉村  
心を用るに疎くあつて高名を失へり

○同役岐阜落城のり黒田肥前守長政藤堂和泉守高虎田  
中兵部太輔長胤生駒雅樂頭吉正幸山伊賀守等城早く  
落ちし故手小不合てを憤りさうが大垣の城を責んと  
て進み行あのもれ石田三成浮田秀家島津義弘小西行  
長らに勢二万斗岐阜の落城せしことを不聞後援のり先  
軍を發を呂久郷戸の辺りて行合ふ田中先登しと三成が  
兵を討三成が先鋒敗しつり義弘のり三成へ軍使を

遣しし先陣少敗しなまども後陣猶戦よらうをあり敵の  
勝を貪て部曲乱り此虚りのりて横さるに突バ大刹の  
らん疾く兵を進めらまよとつども三成不聴しと岐阜  
已に陥り俄へば是を責くる勢績き可來今少し利有と  
も畢竟の勝小つらど巢穴をかきしと變を見俄らん  
とく軍をかきとらるのり西黨大敗しと郷戸赤坂迄  
二里の間追討小逢者ゆびし義弘の言小後て横小  
つらを東黨の敗走必然らん惜き図を失へり

○同役長胤郷戸を渡らんとするもれ中間の中は水鍊とよく  
よる者あり是をしと瀨踏せしむ大雨の後水増しと  
浅瀬をよるも諸人渡り兼る所へかれ中間川へ飛へり

或へ浮或へ沈て甚深しと云るが歸て浅く候と云る  
長胤先は汝がしつりし体は深かきし体なるが今浅しと  
云る如何と被尋多きばかり者答て浅き体を見候し他  
の備より先を淨ひ渡り候しと云ると深き体を仕候と  
云ふ長胤則浅き通りを渡りて先登の功ありかの中間と  
此功よりして郷戸三郎左衛門と号し士の列に入らま  
さるが後細川家小つら病死せり

○同役源君赤坂は御着陣有浮田秀家勢より大垣の城  
ふきつり三成は對し今日東国より上りつる諸軍の陣  
營を見むに營法不嚴軍令不整淺間さるる体なりかまが  
敗刑よ兼し今夜軍を發し營を敗らば必利ありと云れ

彼が銳氣を奪ひ味方の勇を益の謀あらんと勸めども  
三成不果しと止ぬ能因と云らし利を見て不取敷度也

○同役十五日の未明赤坂の惣勢関原へ打出辰上刻内府  
公野上村西海道南桃栗原と云山小御旗を立らる御旗  
本組段々の御備関原町東の端まで十二町程あり御先  
へ則福島左衛門大夫同刑部少輔京極侍從藤堂佐渡守有  
馬玄蕃頭山内對馬守田中兵部少輔二番備黒田甲斐守竹  
中丹後守三番備下野守忠吉卿井伊兵部少輔本多中務太  
輔酒井左衛門公御馬先へ御小姓組段々の備五の字の御使  
番五色の御母衣組御馬さるし金銀の半月切る金銀の扇  
子へ大久保彦左衛門御馬の先は進つり今日未明小雨降





とも二の味方小用の玉に勝軍ありしと云りこの戦  
ひ半は名島秀秋より大谷刑部備へつれか  
則吉隆馬上は自害毛利秀元戦場より東方へ返此色を  
見て諸手の敵崩色付しと云り

○同役小 家康公御合戦あり御詮議石田が陣場小  
池村柵より東へ討つる首は高名その品軽重あり柵を  
西へつりつる捕首は追首あり南宮山の敵は追手の敗  
北を聞てのろろ退散あり

○同役翌十六日江及佐和山へ向りしと五字の衆諸手  
仰渡さる處は申の下刻より大雨のとき山中村御本陣  
大雨は付惣軍小屋々々支宅の火を焼くを得御旗本

より惣勢へ生米喰べし少の内水は米を浸し喰べ  
しやあり不破関川の洪水は敵味方の死骸流るる影し

○同役 家康公牧方表は御旗を立られ今度討より来る  
敵の首御實檢あり公甲冑を召換身の御長刀を持せらる  
牧方前野御牀几小御腰をわけらる御張肘おて大坂の方  
ふ向らせられ御前は御旗七本金の扇子の御馬おる御鉄  
炮百丁火さるに火付御子百張矢をあげ御槍百本拔身御  
右小井伊本多大久保酒井柳原御譜代の諸將伺公より上  
り秀忠公初奉り御一門方御左の池田三左衛門福島左  
衛門大夫その外今度忠節の大小名毛氈を引張肘おる  
伺公の外様の大名人馬おる立し所は具足櫃を引付る

伺公を扱諸の首曲物小入上を詰めて包くその須むり取り  
て曲物の蓋を明て首を出さばその次は桶に入らる首六ツセツ  
わく其外誰々の手へ討とると眞をう紀並より然るも死ふ  
公とく首實檢あるべしやと池田福島兩將へ上意御受を  
御殿宜く御座らせられ候旨申上る其殿立より玉ひ長刀を  
御杖に御つれりて御張肘にて左の御眼を御眼おりして上  
覧その殿前後左右大小名一同は頭を地へ付玉ふ各頭を上  
て張肘めりて伺公御足拍子を左より御みりて右を御ふ  
り又左より御踏納めらせらる鯨波を曳くくと長く御  
あげ諸軍一同はわくと声を上げ奉るさて御長刀を御  
賜よりそと受取奉り秀忠公へ渡進上仕る秀忠公謹と

御頂戴候りそのうち御長刀持人は御渡りして御  
あり

○備前少将光政の士上泉治部左衛門義郷り上泉主水が甥の  
て大坂兩度の役も武功あり光年の頃池田信濃守政言  
光政の上泉小具足箱小利方より紀制法有や聞置て家中の  
士小も言聞せんと尋られり上泉答て及小も仕膽小  
も仕候が有來るよろい篋を用んといふ様も言さく候  
関が原大坂兩度の役天下諸軍馳集り候は種々の品有て  
是ぞ利有と申して承り候重き害有て輕き小利有候  
へどもあまの軍行に定法有て左の遠路を押して  
まが必憂とまらぬ不足候山林繁茂の地は利ありと申

ラ益

後へぞも具足箱さへ持行よ不自由なる地へ大人數を押し  
入る何の益有べしやモナラフ 只有まうせして用よモナラフ 被令然べく  
覚へ後とれりモナラフ

○滝川左近將監一益武藏野合戦に撃負て退口は極暑の頃  
なまは馬甚疲て遍身汗よひたまり川を乗渡すは水と  
飼ものあり水を不飼ものあり水を飼もの馬は十町歩り  
みく皆行休まるとれども不飼もの馬は別条ありと也

常山紀談拾遺卷之二

